

# 青春スクロール

## 母校群像記

saitama@asahi.com

### テディベア作家・芸妓・料理家・多士濟々

熊谷女子高校（以下、熊女）の卒業生はまさに多士濟々。活躍の場もバラエティーに富んでいる。

最近、耳にしない日はない言葉の一つ「SDGs」（持続可能な開発目標）。達成の一翼を担う生物多様性の保全・再生に取り組むのは、国連大学サステイナビリティ高等研究所（東京・渋谷）の野口美由紀（31、2009年卒）。

中学時代に熱帯林の大規模破壊の映像を見て進路を決めた。決心は揺らぐことなく、「熊女時代に打ち込んだのは勉強」と言い切る。そして書道部の活動にも没頭した。展覧会前になると運動部並みの厳しさ。夕方から午後11時近くまで書き込みに明け暮れた。

東京都庁を経て、19年11月から現職。生物多様性条約の締結国、特に途上国の支援に忙しい。いまでも続く部活同期との集まりが癒やしになっている。「素の自分に戻れる貴重な時間です」

「熊女って本当に頑張り屋さんが多かった」。こう話すのはデビュー作家として「世界一」に2度輝いた藤田美賀（56、1984年卒）。子どもの頃から絵が好きだった。高2のとき、当時の浦和市にあった美大向け予備校に通い始めると、一心不乱に絵筆を走らせる同級生がいた。日本画家の関田比佐子（同）だった。その姿に刺激を受け、志望校に合格。卒業後、パッチワークの材料などを扱



「かざさん花の冠を」。校歌の最後の1節が書かれた卒業記念のマグでコーヒーを飲むのが日課という野口



「三味線といえば満彩希と言われるまでは頑張りたい」と児玉（画像は加工してあります）



「いま夢中になれることを楽しんで」と在校生にメールを送るのSHIORI

## 県立熊谷女子高校11



藤田の作品は大小様々。一番大きいものはキルト作家だった亡母との親子展の記念の品だ



奄美観光大使や香川・観音寺市の地域おこし協力隊員も務める渡辺。体感を共有できるドローン映像をSNSで積極発信する

う会社に就職し、テディベアに出会う。美大で学んだ色彩、モノの捉え方が役立つ。熊谷市内の工房で新作づくりに励むが、ロシアのウクライナ侵攻が気がかり。「両国には若い作家がとて多。早く平和が戻ってほしい」

児玉実華子（31、2009年卒）は、京都・祇園東で唄や演奏を担う芸妓「地方」として日本の伝統文化を受け継ぐ。

4人姉妹の末っ子。高校時代は目立ちたがり屋で、何にでも興味を持って過ごしていた。芸妓を目指すきっかけは同志社女子大学1年の時。バイト先のベテラン芸妓の立ち振る舞いや周りへの気配りに憧れ、4年生の1年間、住み込みで修業。「満彩希」の名で現役大学生初のデビューとなった。

卒業後は帰郷する約束だったが、家族も応援。秋の「祇園をどり」には毎回、秩父から貸し切りバスで応援に来てくれる。コロナ禍で中止が続いているだけに「今は」

これは人生を左右する。進路室に、顧問になった加藤秀昭（60）と、坂戸西高校教頭IIを訪ねると、背表紙に弁護士、行政書士など書かれた進路指導用の本が書棚にズラリ。その中に「ツアーコンダクター」という文字を見つけた。「針路が決まった瞬間でした」と渡辺。秘境専門の旅行社を経て、「とまご」の名でフォトエッセー「離婚して、インド」（幻冬舎）などを出版。いまはドローンをアーティストとして活躍中だ。

熊谷女子高校編は今回で終わります。この連載は猪瀬明博、川野由起、黒田早織、坂井俊彦、佐藤太郎が担当しました。

「いま夢中になれることを楽しんで」と在校生にメールを送るのSHIORI

熊谷女子高校編は今回で終わります。この連載は猪瀬明博、川野由起、黒田早織、坂井俊彦、佐藤太郎が担当しました。

熊谷女子高校編は今回で終わります。この連載は猪瀬明博、川野由起、黒田早織、坂井俊彦、佐藤太郎が担当しました。